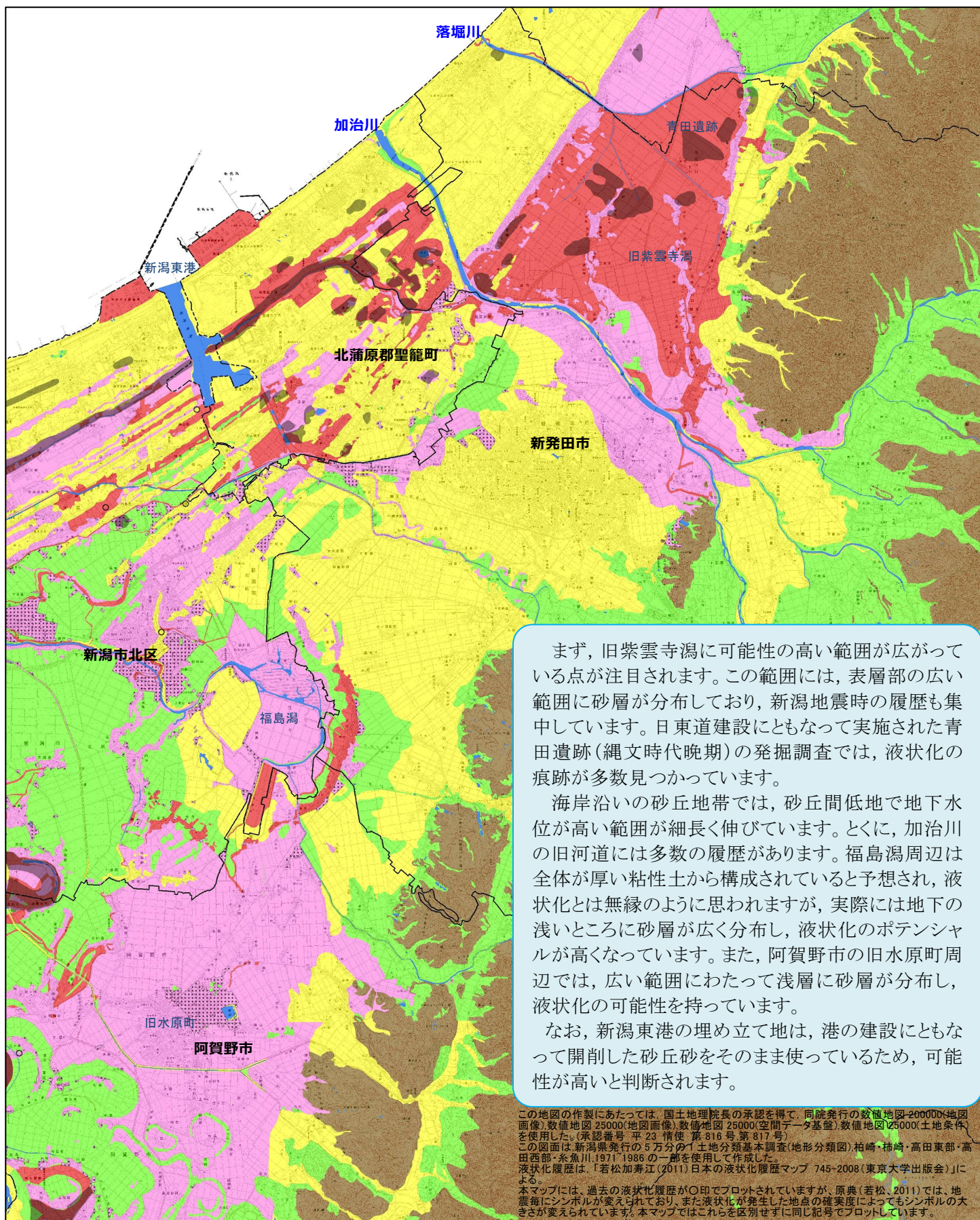
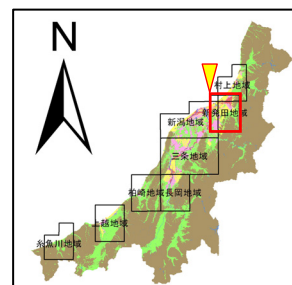
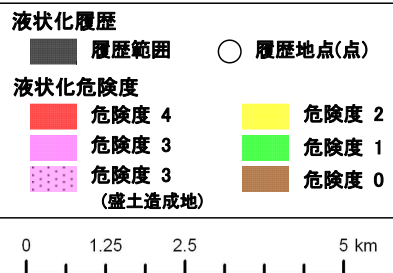


新発田地域



まず、旧紫雲寺潟に可能性の高い範囲が広がっている点が注目されます。この範囲には、表層部の広い範囲に砂層が分布しており、新潟地震時の履歴も集中しています。日東道建設にともなって実施された青田遺跡(縄文時代晩期)の発掘調査では、液状化の痕跡が多数見つかっています。

海岸沿いの砂丘地帯では、砂丘間低地で地下水位が高い範囲が細長く伸びています。とくに、加治川の旧河道には多数の履歴があります。福島潟周辺は全体が厚い粘性土から構成されていると予想され、液状化とは無縁のように思われますが、実際には地下の浅いところに砂層が広く分布し、液状化のポテンシャルが高くなっています。また、阿賀野市の旧水原町周辺では、広い範囲にわたって浅層に砂層が分布し、液状化の可能性を持っています。

なお、新潟東港の埋め立て地は、港の建設にともなって開削した砂丘砂をそのまま使っているため、可能性が高いと判断されます。

この地図の作製にあたっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の数値地図25000(地図画像)、数値地図25000(空間データ基盤)、数値地図25000(土地条件)を使用した。(承認番号 平 23 情使 第 816 号 第 817 号)
この図面は、新潟県発行の5万分の1土地分類基本調査(地形分類図)、柏崎・柿崎・高田東部・高田西部・糸魚川、1971・1986の一部を使用して作成した。
液状化履歴は、「若松加寿江(2011)日本の液状化履歴マップ 745-2008(東京大学出版会)」による。
本マップには、過去の液状化履歴が○印でプロットされていますが、原典(若松、2011)では、地震毎にシンボルが変更されており、また液状化が発生した地点の確実度によってもシンボルの大きさが変わっています。本マップではこれらを区別せずに同じ記号でプロットしています。